

くじら日記

太地町立博物館から



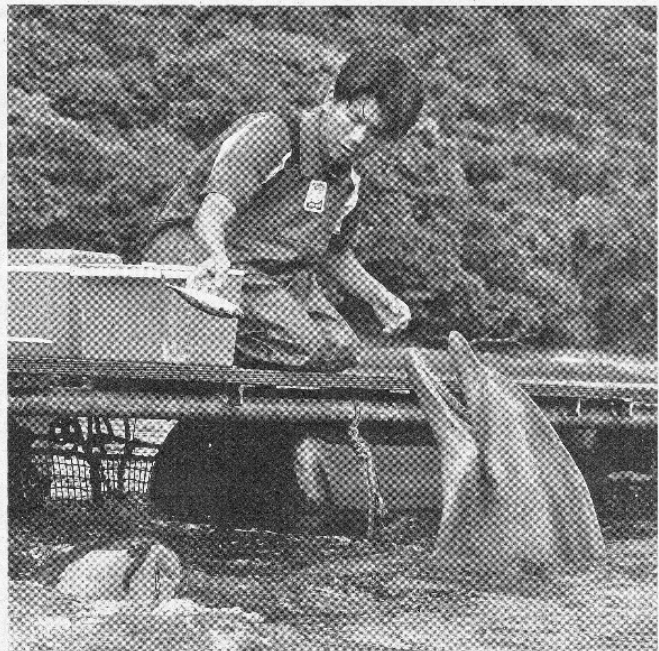
太地町には、クジラの学術研究拠点となっている「森浦湾くじらの海」があります。100頭以上の小型鯨類が暮らしていて、くじらの博物館のトレーナーが中心となって飼育管理に取り組んでいます。その一人、鄭沢鴻さんは中国から来たトレーナーで、9月に加わったばかりです。それにもかかわらず餌の準備からトレーニングに至るまで、一連の業務の要領をすぐにつかみ、ほかのトレーナーに後れを取る様子は見られません。実は、沢鴻さんの太地町訪問は今回初めてではないのです。

中国から来たトレーナー

太地町は、国内外の水族館施設と学術・技術協力に関する協定を交わし、交流を通して、鯨類の飼育や繁殖に関する技術の向上と学術研究の推進、そして施設の発展を目指

しています。中国で新たに開館する水族館とも協定を結び、イルカのトレーニングとトレーナーの育成に関わったことがあります。沢鴻さんはその水族館のトレーナーだったことがあり、水族館開館前の2017(平成29)年に研修生として太地町に来た一人でした。

「長く日本で働くことが夢」



森浦湾くじらの海でイルカを飼育する鄭沢鴻さん＝太地町

「それが夢」と目標も掲げている。中国は海に面する地域が少ないためか、鯨類は比較的遠い存在のように思えます。トレーナーを目指す若者でさえも、テレビやパソコンなどの画面を通してしかイルカを見たことがないという人が意外と多いのです。国内外を問わず、交流を通して人材育成や海洋教育にも役立ちたいと思っています。

太地町の研修では、講義や実習を通して、鯨類のトレーナーの仕事を通り学ぶ機会となりました。文化や言葉などが異なる環境でも、謙虚な心持ちで研修に臨む姿勢が印象的でした。沢鴻さんは当時このことを、「日本の規律正し

さ、仕事の計画性、一人ひとりの責任感に感銘を受けた。飼育の考え方やトレーニングの方法を知り、成長することができた」と振り返ります。中国に戻るとリーダーに抜擢され、イルカショーの立ち上げやトレーナーの指導に携わります。原則、第1日曜日に掲載し

◇ (太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹)